

久楽流は、知識より**感性を優先する旅のスタイル**なので、旅立ち前に、いろいろインプットしても、旅の期間もあり、出会いがあるかもわからないことが多い。前味、中味、後味、という言葉。期待すると、**後味**の問題が残る。再訪することもある。心境や季節で、光景も印象も違う。

心模様の発信の仕方に悩みながら、日々、出来ることしか、出来ないが・・・スウェーデンの旅行ガイド。なかなか、見事な内容なので、**そのまま引用、ご紹介**。どう受け止めるか、記録画像からの印象も、人それぞれ。

「自然と福祉の国、スウェーデン」

スウェーデン人は、豊かな市民生活を保障する優れた福祉社会を築きあげてきました。医療保険や年金、そして住宅や保健所など、あらゆる福祉政策において世界最高のレベルの質を誇っています。そのため、スウェーデン社会は、市民同士の争いや衝突から、ほとんど解き放たれているといっても過言ではないでしょう。加えて言うなら、こうした高度な福祉社会に慣れてしまっているため、何となく**それが当たり前**のように感じているスウェーデン人も少なくありません。

たとえば、スウェーデン人の有給休暇は、世界でも一番長いといわれ、人々は、年間6週間の休暇を過ごしますが、それにもかかわらず彼らに「望ましい生活とは何か」と聞けば、「**豊かな余裕を持てる充実した家庭生活**」と答えることでしょう。忙しい日々を過ごす人から見れば、ひょっとしたらスウェーデン人は、怠け者であるかのような錯覚に陥るかも知れません。

ところが実はスウェーデンのオフィスや工場では、より短い時間とより小さな作業グループによって、**他の工業国の職場と同じ量の生産が行われている**のです。

そして、このような合理化のために、スウェーデンの職場では、**厳しいテンポで、仕事が進められています**。それでも、人々は、午後5時、あるいは、6時には職場から解放されるので、この厳しいテンポの仕事もさして気にならず、**それなりの価値があると**みなしています。なぜなら、夜10時~11時頃まで明るい夏期は仕事が終わった後に、明るい太陽のもとで**家族の回樂や自分の趣味に費やす時間時間が、十分に持てる**からです。

スウェーデン人にとっての魅力的な休暇は、自然の中で、**家族と一緒に過ごす戸外生活**と切り離して考えることはできません。アーキベラゴ（群島）周辺で、ヨットを楽しむ生活、森の奥深くに建てた小さな別荘での生活、あるいは、山岳地帯でのハイキングなどが、スウェーデン人にとっての**一般的な余暇の過ごし方**です。

このように**自然と親しむ余暇**を通じて、スウェーデン人は、**明日への力を充電**します。だから、お金を浪費しながら豪勢な休暇を過ごす人々は、**人生の真の価値や深遠な意味**をよく理解できないと考えるスウェーデン人が多く、**お金をかけずに、ゆったりと自然に浸ることが最も重要**だという**価値観が浸透**しています。ですから、スウェーデン人の長い休暇は、必ずしも**大金持ちを意味しているわけではない**のです。

野外レジャーの他にも、休暇の時間を有効に活用するために、スウェーデン人は、**家庭での日常的な仕事の大部分を、自分で処理**しています。家のペンキを塗り替えたり、井戸を掘ったり、窓枠を取り替えたり、さまざまな仕事を、こなします。そのため、職場での労働時間より、休暇中の家庭での労働時間の方が長いという人も少なくありません。

だからスウェーデン人は、**器用な人が数多く**います。フローリングやテラス作りの名人もいれば、ボートの修理で休暇中にプロ級の腕を磨いたという人もいます。

豊かな生活を実現するには、
知的な労働と肉体的で実用的な労働との組み合わせが不可欠と考える人が多いのです。

前者は、職場で得られ、後者は、余暇で得られます。

彼らは職場を通して、いろいろな作業において**腕が利く友人や知人のネットワークを持ち**、余暇に、それぞれが、その腕前を交換し合います。隣人の家の屋根を張り替えた、**お返しに**、自分の庭に立てる小屋の基礎作りを、手伝ってもらう、**そんな交流**が、いたるところで見られます。

スウェーデン人は、**自然は一人で体験し、楽しむのが最適で**、せいぜい気心が知れた友人たちと楽しむのが、**本来の姿**だと考えており、**たがいが、不要に近づきすぎるすぎることを嫌います**。

テントを張る時は、できるだけ他のキャンパーの目に入らない静かな場所を選び、クルージングを楽しむヨットマンは、誰も停泊していない小さな入江に、錨を下ろしたがります。

もちろん、これは**人口密度の低い、この国ならの事でしょう**。スウェーデンの国土は、1.2倍。人口は、900万にも満たないのです。国土の大部分、北部地方では、広大な土地に、家屋や小さな村が点在しているに過ぎません。**大きな都市が集まる南部でも、手つかずの自然が**、目と鼻の先に**点在**しています。このため、**雑踏とは、どういうものかを知りません**。

ストックホルムの中心に住む人々でも、30分もかけずに近くの森や湖、アーキベラゴ（群島）に出かけることができます。午後5時に退社して、30分後にはすでにヨットを、あやつっているという生活は、スウェーデン人にとっては、日常茶飯事のこと。夏の間は、昼間を利用して、メーラレン湖まで散歩し、この湖で、水浴びを楽しむ人もめずらしくありません。

そんなスウェーデンの自然の美しさには、誰もが、感動するはずですが、**この国の生活と文化は、広大で美しい自然との関わりを抜きに語ることはできません**。

北は、ノルウェーやフィンランドと国境を、ともにしながら北極圏を遙かに越え、南は、オアスン海峡を挟んでデンマークと隣接する南北に細長い国土は、海岸線も総延長7,000kmに達します。

夏になると、高山植物が咲き乱れる北西部の山岳地帯からは、東海岸へ流れ出る河川が清らかな水を運び、この地を旅する人々に、雄大な景色と共に魚釣りやラフティングなどアクティビティの場を与えています。

全国各地に散在する湖沼も、シリアン湖を中心に広がるダーラナ地方、メーラレン湖の女王と呼ばれるストックホルム、森と湖で名高いスモーランド地方、ヴェーネン湖畔の都市や村々、名を挙げれば切りがありません。

「**水が豊かな土地には産業が興る**」という話の通り、水に恵まれたスウェーデンは、自然の宝庫と呼ばれる一方、水力発電によるエネルギーで、産業を興し、福祉を充実させた豊かな**工業国**を築きあげたのです。

ストックホルムの歴史

ストックホルムは、**バイキングの時代**、メーラレン湖内の島に構えた彼らの貿易拠点を守るための**要塞都市**として建設され、その歴史をひもときました。

その後、中世に入って、ハンザ同盟時代を迎えると、

商人や職人の住む街として発展。

16世紀にスウェーデン建国の主、グスタヴ・ヴァーサ王によって、この国の首都に定められてからは、代々の王を迎えて、栄華の時を刻み、北欧屈指の都として、その名を広めました。

高台から街を見下ろした時や、古い通りを歩いた時、長い歴史の一片が、あちらこちらに漂っていることに気づくでしょう。

以上、スウェーデン旅行ガイドの文章の一部を、
思いついて、そのまま掲載。